「有明集」前後

蒲原有明

青空文庫

明治三十八年に「春鳥集」を出したときには、多少の自信もあり自負もあつた。わたくしのやうな氣弱なものも詩作上思ひきつて因襲に反撥を試みたのである。あの稚拙な自序を巻頭に置いたのもその爲で、少しきおつたところが見えて落ちつかぬが、それも致しかたない。

さて象徴詩がどういふ筋道を通つてわが詩壇に導かれたかは、今こゝに述べにくい。それは別に研究を要すべきことである。然し思つたよりも早い時代に始まり、ヴェルレエヌの死（一八九六年一月）がその機縁を作つたと云へば、さもこそと肯がはれる道理がある。即ち同年（明治二十九年）三月發行の「文學界」は上田柳村氏の草した、この落魄の詩人を紹介する記文を載せてゐる。この事はすでに「有明詩集」自註の中に誌しておいた。それから後になつて森鴎外氏は「めざまし草」の數號に亙つて「審美新説」を譯出した。これが一册の本になつたのは明治三十三年であるから、無論その前のことである。この「審美新説」には自然主義と象徴主義との關聯推移を説くこと詳で且つ斬新であつた。わたくし共はこのめづらしい藝術の部面のあることを知つて啓蒙された。それからまた少し程經て、今度はあの有名なシモンズの「象徴派運動」（一八九九年初版）に注意が向けられる順序となるのであるが、この本は長谷川天溪氏が最初に取寄せたもので、花袋、藤村、泡鳴の諸氏も、それにまたわたくしも、その本を借りて廻し讀みにした。藤村氏がわざわざ小諸からイブセンの「ボルクマン」を小包にして、これを見よと云つて送り越したと殆ど同時であつたらう。わたくしからはシモンズの本を

廻送したかとおぼえてゐる。ヴェルレエヌの死からシモンズの著書までの間には、イブセンも、ハウプトマンも、ユイスマンも、マアテルリンクも、一應は讀まれ且つ紹介されもしたがたとへばマアテルリンクにして見ても、あの「温室」の詩篇の方は、これも柳村氏が「海潮音」（明治三十八年）刊行の後譯出して、それが「明星」誌上に掲げられるまでは一般によく知られてゐなかつた。われわれ多數はもともと英語譯にたよつてゐたので、かういふ不便は免れ難かつた。

それに就て挿話がある。岩野泡鳴氏はあの負け嫌ひであるが、それも隨分とやかましいマラルメを擇んで、佛蘭西語の原本から直接に飜譯するといふ意氣込みであつた。「白鳥」もさうであるが、「泡」と題する詩が手始めで、をりからわたくしは同氏を訪問してゐたので、少しは字引の方の手傳をした。詩は短いが、一字一字洩れなく引くのであるから大變である。まづさういふ熱心さはそのころ誰しも抱いてゐたところである。佛蘭西語を全く知らないでゐて、マラルメを原詩から譯さうとするのは無謀である。笑はれてよいにはちがひないが、そこには眞劍味もあり強味もあつた。とても才人ぶつてはゆけなかつた時代である。

わたくしは與謝野寛の紹介で、内海月城氏に伴はれて、上田柳村氏を本郷西片町にはじめて訪づれた日はいつであつたか確にはおぼえてゐないが、新詩社が麹町番町にあつた頃のことである。それから幾回目かの訪問のをりに、柳村氏はルコント・ド・リイルを頻りに推奨して特にあの「眞晝」の一篇を讃嘆して、原詩を誦して、その作風に就てわたくしに親しく語るとこ

ろがあつた。わたくしはその時の柳村氏の言葉を忘れずに魂に刻んでゐる。パルナッシャンの套語「無痛感」はどこか「非人情」の禪語に類するものがあり、マアテルリンクの神祕感と共に極めて東洋的である。これ等の詩人の思想がわたくしの觸れ易き心の養ひとなつたこと幾許なりやは量り難い。わたくしの詩にパルナッシャンの影響がありとすれば、それは全く柳村氏の鼓吹によるものである。

　自然主義より象徴主義への推移といふことは、評論家によつてあまり唱へられないやうであるが、わたくしは前に述べたとほり、「審美新説」を讀んで感化されたことが先入主となつてゐる故か、この兩主義の關係をさういふ風に密接に考へてよいものと思つてゐる。ロマンチシズムから直ちにシンボリズムには移れぬわけである。この兩主義の推移といふことは例を擧げて見れば、ユイスマンスの一生の經路がこれをよく語つてゐる。この作者には鰊の有名な描寫がある。これなど自然主義的描寫に即する一面の歸結と見て然るべきものである。自然主義はつとめて感傷風の表現の混入を退けた。この事はかの高踏派の非人情とおのづから相通ずるところがある。考察の熱意と描寫の精緻とはこゝに起らざるを得ない。その熱意が幻想に入り、その精緻が滲透して暗示となるとき、そこに感覺の交徹による象徴主義が生れるのである。然しながらわたくしの言はうとしてゐる所は、象徴主義に就てその解説を試ることではなかつたはずである。端的にわたくしの本意を明すならば、わたくしの詩は「春鳥集」より「有明集」に至るまで、上に擧げた諸種の思想の影響を蒙つてゐたといふことを述べて置きたかつたまでゝ

ある。わたくしの作詩の動機に就いては「有明詩集」自註に大略書いておいたのを見てもらひたい。概して※情的動機は幾許も無く、そこには却て「非人情」が附き纏つてゐる。純情をきおふこの頃の若い方々にはかゝることも飽き足らぬ一つであらう。

わたくしの詩のごときは説明せよと要求せられても説明の仕様のないものである。あらゆる思想の混亂であるとも云はれよう。然しその混亂にしても中心を得ればおのづから形をなすのである。その形をわたくしはいつも渦巻に喩へてゐる。卍字であり巴字である。生動の態がそこに備つてゐる。わたくしはさう信じて、これを純情風の直線式のものと對蹠的に觀てゐるのである。わたくしはこゝで純情的の詩風を貶すつもりは毛頭ない。ただどちらからも妥協の道はあるまいといふことを云つておけばよいのである。この渦巻式の流儀は今は全く詩壇に跡を絶つてゐる。尤ともわたくし以外に誰がこんな面倒な詩を書いたであらうか。それさへも確かなことは判らない。かやうなわけで、「有明集」は思想的にも表現的にも渦巻の中心をなすものであるが、その思想情念の傾向はいつでも東邦的であつた。わたくしの中に若しエキゾオチシズムが潜んでゐるとすれば、それは單に西歐への憧憬ではなくて、西歐でいみじくも採擇された新藝術主義を通じて、わたくしの生れ故郷なる東邦の文化に對する反省より以外のものではなかつたのである。

「有明集」は明治四十一年歳首に刊行したものである。わたくしはこゝで集の巻頭に添へた著者の小照について斷つておきたいことがある。著者は生れつき痩身で、未だ曾て肉づいたとい

ふことを知らない。然るにその寫眞に撮られたところを見れば、似ても似つかぬ肥滿さである。わたくしは必ずしも痩躯を庇ふものではないが、あれを見てゐると忽ち胸が惡くなる。實を言ふと、あれはその前年の師走の初めに發行所の易風社から寫眞師をよこされたので、寒い日の庭の隅で撮らしたものである。ひどい病氣の前提としてあれ程まで水氣が來てゐたものを、不注意にも醫療を嫌つて、そのまゝにしておいたのであるが、その應報として月の中頃から床に就て了つた。「有明集」の初校を檢べ了つたかどうかといふ時分であつた。わたくしが身體を惡くしたのは、その年の夏、木曾御嶽に登山を試みて少からず無理をしたことも一の誘因であつたらう。秋から絶えず寒冒をひいてゐて、擧句の果は扁桃腺を腫らしたりなどした。それまではまだ好かつたのであるが引つづいての本患ひである。急にひどい眩暈を起して仆れてしまつたのである。病氣は腎臟炎で、三月ばかり寢てゐて、漸く離床したが、その後もずつと健康を害してゐた。わたくしが藝術よりも宗教的の氣分に傾いて行つたのは、さういふ理由からでもあつた。兎に角「有明集」出版後は、わたくしの詩風に對する非難が甚しく起りつゝあつた。要するに新時代がまた別働隊を組んでこゝもとに迫つて來たのである。わたくし如きものが苦しんで一の詩風を建てゝから未だ幾年も過ぎてはゐない。さう思つて、その當時の詩壇の狹量さに驚くよりも、全くいはれなき屈辱を蒙らされたものと推測したのである。口語體自由詩に對しても強ちにこれを排擊してはゐなかつた。わたくしにしても素より因習に反撥して起つたものである。然るにわたくしは圖らずも邪魔扱ひにされたのである。謂はば秀才達の面白半分

の血祭に擧げられたといつてよい。意外な目に遇つて、後に事がよく判つて見ても、わたくしは詩に對して再び笑顏は作れなくなつた。殊に詩人が嫌になつたのである。

わたくしはいづれの盟社にも屬せず、終始孤立して來たといつてよいであらう。一時は藝術上新主義の母胎とまで噂された龍土會の一員として、幾分の陶冶を經て來たにはちがひないが、その龍土會自體の樣子は今眼前に離合しつゝある詩人の團體とは餘程の懸隔があつた。その龍土會すら影を薄くした。時勢の變は止む事を得ぬものである。

（昭和四年十月）

青空文庫情報

底本：「日本現代文學全集　22　土井晩翠・薄田泣菫・蒲原有明・伊良子清白・横瀬夜雨集」講談社
　　1968（昭和43）年5月19日初版発行
　　1969（昭和44）年10月1日第2刷
初出：「日本現代詩研究　『現代詩講座』四」金星堂
　　1929（昭和4）年10月15日
※初出時の表題は「『有明集』當時の思ひ出」です。
※「ユイスマン」と「ユイスマンス」の混在は、底本通りです。
入力：広橋はやみ
校正：小林繁雄
2005年3月16日作成
2015年10月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「有明集」前後

蒲原有明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/